

プラネタリー・アーバニゼーション

ニール・ブレナー * & クリスチャン・シュミット **

(平田周 *** 訳)

初出: Neil BRENNER and Christian SCHMID, "Planetary Urbanization," in ed. Matthew GANDY, *Urban Constellations*, Berlin: Jovis, 2012, pp. 10-13.

再掲: Neil BRENNER and Christian SCHMID, "Planetary Urbanization," in ed. Neil BRENNER, *Critique of Urbanization: Selected Essays*, Basel: Birkhäuser, 2016, pp. 186-191

ここ数十年にわたって、都市研究(Urban Studies)の分野は、引き続きグローバルな転換の途上にある都市、都市生活、都市化の過程の役割に関する新しい思想がこれまでに例を見ないほど提出されることで活気づけられてきた^{原注1}。しかし、こうした進展にもかかわらず、この分野は、現代よりも19世紀後半や20世紀初頭であればより妥当であったような人間の居住空間の地図作成に基礎を置き続けている。

20世紀初頭は、大規模な工業都市地域と郊外地域が、かつての「農村地方」における人口統計や社会経済そして環境面での主要な変化と密接に連動して、世界各国で急速に確立されていった時代だった。結果として、各国の時代状況や言語的な慣習を超えて、20世紀の都市研究の分野は、明示的であれ暗示的であれ、一連の地理的なコントラストを通じて、自らの理論的カテゴリーや研究対象を定義した。都市生活の種差性を最適に定義する方法に関する議論が盛り上がったにもかかわらず、都市生活はどこでも、「非都市的(non-urban)」と呼ばれる領域、一般的に「農村」として分類される領域と対置して規定されたのである。理論や調査に関するパラダイムが進化するにつれて、このように想定された都市と農村の連続体に含まれるそれぞれの用語に代えて、呼び名が変更されてきた。事実、その基本要素やそれら基本要素の連関の性質を概念化するための最適な方法に関する学者たちの理解はあまりにも変化したのである。例えば、「郊外suburb」という英語圏の概念や「郊外(banlieue)」というフランス語の概念が、急速に都市化する領域内部で生じたより深い社会空間の分化を画定するために、導入され、広められた^{原注2}。それにもかかわらず、20世紀の都市研究の多くは、都市が——あるいは、その後用いられる「コナベーション^{訳注1}」、「都市部」、「都市地域」、「大都市圏」、「メガ・シティ」、「グローバル・シティ・リージョンズ」

が——、ある特定の領域類型を表象するという前提に依拠し続けている。特定の領域類型、それは質的に特殊であるがゆえに、都市の境界を超えて広がる都市に非ざるもの(non-urban)と考えられてきた空間とは異なるものだったのである。

都市地域、郊外地域、農村地域を分ける境界区分は、歴史的に移動することが認められた。しかし、それらの空間そのものは、はっきりと違うものとして区別され、普遍的なものであり続けると考えられたのである。都市と都市的なものの明瞭性に関するパラダイム上の齟齬が深まったのにもかかわらず、都市研究の分野全体は、ながらく、自らの認識論的かつ経験的な作業のために、相対的に安定した、都市に非ざるものと見なされる領域の存在を「構成的な外部」として前提してきた。要するに、1920年代のシカゴ学派の参入、1970年代のネオ・マルクス主義の「新たな都市社会学」やラディカル地理学の興隆から、1980年代から1990年代にかけての世界都市やグローバル・シティをめぐる論争にいたるまでの相異なる理論的・政治的パースペクティブを超えて、20世紀の都市研究の主な伝統は、共有されながらも、多くは問題にされることのなかった地理学的な前提を受け入れていた。そうした前提は、都市研究の分野が最初に確立された19世紀末から20世紀初頭にかけての歴史地理的な諸条件に根ざしていたのである。

しかし、ここ三〇年のあいだ、都市化の形式は、根底から作り変えられてきた。この過程は、都市理論と都市調査をながらく下支えしてきたこれまでのメタ地理学的な前提に重大な疑問を投げかける。主要な大都市圏の空間と人口面での劇的な拡張についてはすでに広く論じられてきたのでおくとして^{原注3}、ここ数十年のあいだに、あらゆる空間のスケールで、いくつかの同様に広範囲の都市的なものの内破と外

* ハーバード大学デザイン大学院
** スイス連邦工科大学チューリッヒ校バーゼルスタジオ
*** 南山大学

破壊^{訳注2}が見られることにもなったのである。

——都市化のスケールの新たな創造。拡張的に都市化された相互依存の関係は、きわめて巨大に、そして急速に広がる。結果として、この関係は、多数の中核を有する世界の大都市圏で確立することで、どんな大都市圏をも超えて、しばしば数々の国境を横切る都市的銀河系のスプロールを創出する。このようなメガ・スケール化した諸々の都市からなる星座は、多様な仕方でも概念化され、その輪郭と境界の表象は、重要な研究と議論の焦点であり続けている。その最も卓越した例には、とりわけ、古典的なジャン・ゴットマンのメガロポリス、すなわち「ボスワッシュ」(ボストンとワシントンDC間)や西ヨーロッパの都市化された主要地域を取り囲む「青いバナナ」だけでなく、カリフォルニアの「サン・サン」(サン・フランシスコとサン・ディエゴ間)、中国の南部の珠江デルタ、西アフリカのラゴスの港湾都市のような新興地域の形成と同様に、ラテンアメリカや南アジアのいくつかの都市部の始まりも含まれる。

——都市領域間の不鮮明化と再接合。都市化の過程は、地域化され、さらに再領土化されつつある。旧来の主だった都市機能は、ショッピング施設、企業本社、多面的な物流の中心地、研究機関、文化的な催事会場のみならず、目を引く建築形態、高密度の居住パターンや他の主要なインフラストラクチャーの配置といったものに見られる。こうした機能は、小規模や中規模の町からなる受け皿が拡張し、高速道路や鉄道のような輸送網を経由することで、歴史的な中心地であった都市中核からかつて郊外化された地域に分散されつつある。

——後背地(hinterland)の解体。世界中で、都市近郊と工業の回廊地帯からなる主要都市の後背地は、産業的な都市化のメタポリズムおよびそれに関連する地球規模の都市ネットワークを促進するために、運用され、インフラ整備がなされ、囲い込まれるにつれて、再編成されつつある——そうした後背地が、事業管理部門、倉庫保管の場、グローバルな労働搾取工場、農業や工業の土地利用システム、データ保存施設、エネルギー発電の配管網、資源採掘地域、燃料貯蔵庫、廃棄物処理区域、レクリエーション地域、あるいはそれらが結びつけられた回廊地帯といったもののいずれであっても^{原注6}。

——野生地の終わり。地球のそれぞれの地域で、かつての「野生地(wilderness=ただ広い手つかずの空間)」が変貌を遂げつつある。この空間は、しばしば無制限な世界の都市化によって引き起こされる社会環境的な影響の蓄積を通じてしばしば破壊の対象となるか、さもなければ、どこかよそで生

じた破壊的な環境への影響力を相殺するための「エコシステムサービス」を提供する、生物が生息するための飛び地(bio-enclaves)に転換されつつあるのである。このようにして、世界の大洋、高山地域、赤道付近の熱帯雨林、大砂漠、北極の寒冷地帯、そして、地球の大気圏そのものさえ、ローカルなスケールからグローバルなスケールにいたるあらゆる地理的スケール上で展開するプラネタリー・アーバニゼーションのリズムに段々と互いに結びつけられつつある^{原注7}。

私たちの見通しでは、こうした歴史地理的な展開は、20世紀から受け継がれてきた都市研究領域全体に対する根本的な挑戦を提起する。そして、都市研究の基本的な認識論的前提や分析カテゴリー、そして調査の場は、今日目のあたりにしている世界規模の社会空間組織と環境組織の急激な変化に引き続き関連づけられるための基礎となる再概念化を要請する。したがって、現代の諸条件のもとでは、都市的なものは、特定の居住空間の「類型」に準拠して理解されることはもはやない。そうした類型が、都市、都市地域、メトロポリス、大都市圏、メガロポリス、エッジシティ、あるいは別のものとして定義されようとも、そう理解されることはない。結果として、今日、「都市」というカテゴリーは、研究者や政治の言説におけるその絶えざる波及力にもかかわらず、分析ツールとしてはまったく疑わしいものとなってきている。それに対応して、地域、領土、大陸、地球上の人口密度の高い地域と低い地域とのあいだで起きているまだら模様の差異を特徴づけるにあたり、これまでの都市と農村(あるいは都市と非都市)の区別に依拠することはもはや妥当ではない。現代では、都市的なものは、ますます世界の条件を表象している。この条件のもとに、あらゆる政治経済的な関係、インフラストラクチャーの地理、社会環境的な景観が絡みあっているのである。

こうしたプラネタリー・アーバニゼーションの状況は、逆説的なことに、空間さえもが、伝統的な都市の中核や郊外という周辺をはるかに超えて——農業・工業の生産地帯、工業化された資源採掘やエネルギー発電の地域、「ゴミの風景^{訳注3}」、廃棄物集積場、大西洋横断航路、大陸横断の高速道路や鉄道のネットワーク、世界規模のコミュニケーション・インフラストラクチャーから、高山や海岸沿いの旅行者のための飛び地、「自然」公園、世界の大洋、砂漠、ジャングル、山脈、凍土帯、大気圏のようなかつての広大な野生地の空間にまで広がり——、世界規模の都

市構造^{原注4}に不可欠な要素となったのである。集積作用の過程が、この新たな地勢図の生産にとって本質であり続ける一方で^{原注8}、まるで明確に区別され、境界づけられた普遍的な居住類型に構成されているかのように、政治経済的な空間を取り扱うことはできない。要するに、農村や地方といった従来の観念が、たいてい過ぎ去った工業化以前の時代の歴史地理学的な構成物に由来するイデオロギー的な投影であると次第に理解されてきた現在、わたしたちの都市的なもののイメージもまた同様に根底的に再発明されなければならないのである。

すでに四〇年前に、アンリ・ルフェーヴルは、社会の完全な都市化というラディカルな仮説を提案していた。彼が論じるように、社会の都市化とは、都市形式の分析から都市化の過程に関する研究へと根本的な認識論的移行を要請する変化である^{原注9}。しかし、この根本的な命題の体系的な適用は、いまだ手つかずのままである。おそらく、21世紀の初頭の今こそ、これに着手する機が熟しているのではないだろうか。わたしたちの見通しでは、都市研究の認識論的な基礎は、今日根底的に変えられなければならない^{原注10}。プラネタリー・アーバンゼーションの分析に認識論的に移行することは、都市研究の適切な対象とパラメーターに関してながら根づいた、都市中心的な前提を乗り越える具体的な調査と比較分析の新たな戦略を要請する。こうした新しい研究戦略と密接に関連して、プラネタリー・アーバンゼーションについての研究は、主な理論的かつ概念的な刷新を要請することになる。何よりもまず、わたしたちは、新しい理論的なカテゴリーを必要としている。それを通じて、諸々の場所、スケール、領土、景観を横断する、社会空間の組織、インフラストラクチャーの布置、政治的調整、社会的動員、そして日常生活といったものをめぐる進行中の変化を解説するのである。そのためには、現在地球を作り変えている多種多様な都市化の過程、様々な政治戦略、社会的諸力を通じた重大な異議申し立てを見定める新しい概念的な語彙が創られなければならない。最後に、私たちは、大胆な、実験的かつ境界を壊す方法論的な戦略が、こうした過程の実証的な調査や可視化を促進することを要請する。「都市」研究という他と区別された分野が、こうした理論的、概念的、方法論的な刷新のなかで存続できるかどうかは、今後数十年にわたって探求されるべきものとしてあり続けるような問題なのである。

原注

- 原注1 批判的レビューや評価に関しては、以下を参照のこと。Saskia Sassen, “New frontiers facing urban sociology at the millennium,” *British Journal of Sociology*, 51, no.1 (2000), 143?159; Ananya Roy, “The 21st century metropolis: new geographies of theory,” *Regional Studies*, 43, no.6 (2009), 819?830. Edward Soja, *Postmetropolis: Critical Studies of Cities and Regions* (Cambridge, MA:Blackwell, 2000).
- 原注2 Robert Fishman, *Bourgeois Utopias* (New York: Basic Books, 1989). (=1990, 小池和子訳『ブルジョワ・ユートピア——郊外住宅地の盛衰』勁草書房.); Ann Forsyth, “Defining Suburbs,” *Journal of Planning Literature*, 27, no.3(2012) 270-81.
- 原注3 一般的な概説として次のような成果がある。Tony Champion and Graeme Hugo, eds., *New Forms of Urbanization* (London: Ashgate, 2005); Allen J. Scott, ed., *Global City-Regions* (London: Oxford, 2001). Ricky Burdett and Deyan Sudjic, *The Endless City*: (London: Phydon 2006).
- 原注4 初期調査の事例としては以下のような研究がある。Peter Hall and Kathryn Pain eds., *The Polycentric Metropolis* (London: Earthscan, 2006); Arthur Nelson and Robert E. Lang, *Megapolitan America: A New Vision for Understanding America's Metropolitan Geography* (Chicago: APA Planners Press, 2011); Richard Florida, Tim Gulden and Charlotta Mellander, “The rise of the mega-region,” in *Cambridge Journal of Regions, Economy and Society*, 1 (2008), 459?476.
- 原注5 Edward Soja, “Regional Urbanization and the End of the Metropolis Era” in *The New Blackwell Companion to the City* ed. Gary Bridge and Sophie Watson (Oxford: Blackwell, 2011); Thomas Sievert, *Cities Without Cities. An Interpretation of the Zwischenstadt* (London: Routledge, 2003); Joel Garreau, *Edge City* (New York: Anchor, 1992).
- 原注6 本書13章(注: Neil Brenner, “The Hinterland, Urbanized?,” in Neil Brenner, *Critique of Urbanization: Selected Essays*, Basel: Birkhäuser, 2016 pp.212-223.)とともに、以下の文献を参照のこと。Nikos Katsikis, *From Hinterland to Hinterglobe: Urbanization as Geographical Organization* (Doctor of Design Thesis, Harvard University Graduate School of Design, 2016); Roger Diener, Jacques Herzog, Marcel Meili, Pierre de Meuron and Christian Schmid, *Switzerland: An Urban Portrait*, 4 vols (Basel: Birkhauser, 2007);そして Allen Berger, *Drosscapes* (Princeton, NJ: Princeton Architectural Press, 2007).
- 原注7 以下を参照。William Boyd, W.Scott Prudham and Rachel Schurman “Industrial Dynamics and the Problem of Nature,” *Society and Natural Resources* 14 (2001):555-

70; Neil Smith, "Nature as Accumulation Strategy," *Social Register* 43(2007):1-21; Bill McKibben, *The End of Nature* (New York: Random House, 2006). このテーマはUrban Theory Labのウェブサイト上での以下論考の公開によりさらなる展開を見せている。*Operational Landscapes* (Melbourne: Melbourne School of Design) 詳細は以下URLを参照のこと。http://www.urbantheorylab.net/news/operational-landscapes-exhibition-in-melbourne/ ; Louise Dorignon, "And The Urban Exploded," *Society and Space*, online commentaries, accessed on January 20, 2016, http://societyandspace.com/material/commentaries/dorignon/(※上記現在page not found)

原注8 前掲*Postmetropolis*を参照。より最近の成果としては、Allen J. Scott, and Michael Storper, "The Nature of Cities: The Scope and Limits of Urban Theory", *International Journal of Urban and Regional Research*, 39 no.1(2015)1-15.

原注9 Henri Lefebvre, *The Urban Revolution*, translated by Robert Bononno (Minneapolis, MN: University of Minnesota Press, 2003). また以下の文献も参照のこと。Lukasz Stanek, Christian Schmid and Ákos Moravánszky., *Urban Revolution Now: Henri Lefebvre in Social Research and Architecture* (London: Ashgate, 2014)

原注10 Neil Brenner and Christian Schmid, "Towards a new epistemology of the urban?," *CITY* 19, no. 2-3(2015):151-82. また、Neil Brenner, ed., *Implosions / Explosions : Towards a Study of Planetary Urbanization* (Berlin: Jovis, 2014)

読めるものとして以下がある。アラン・バーガー「ドロスケープ」、チャールズ・ウォルドハイム(編)『ランドスケープ・アーバニズム』鹿島出版会、2010年、202-223頁。

訳注4 「都市構造」と訳出したurban fabricは、ルフェーヴルが『都市革命』で用いた術語「都市の織り目 (tissu urbain)」の英訳でもある。

訳注

訳注1 コナベーション (conurbations) とは、スコットランド生まれの社会学者パトリック・ゲデス (1854-1932)が1915年の著書『進化する都市』(西村一朗訳、鹿島出版会、2015年)で用いた造語。隣接する複数の都市が、行政的な都市の境界線を超えて結びつき、一かたまりの産業的に発達した地域を形成していることを指す。

訳注2 内破と外破 (implosions and explosions) は、カナダ出身のメディア研究者マーシャル・マクルーハンが1964年の著書『メディア論』(栗原裕・河本仲聖訳、みすず書房、1987年)で用いた術語。二つの術語は、それぞれ細分化的な傾向を有する機械時代のメディア特性と統合的な傾向を示す電気時代のメディア特性を意味する。これらの術語をルフェーヴルは『都市革命』(1970年)のなかで取り上げて、都市研究の領域に用いた。

訳注3 「ゴミの風景 (drosscapes)」は、ハーバード大学デザイン大学院ランドスケープ・アーキテクチャー学助教授アラン・バーガーによる造語。日本語で